

清水 浩 昭（日本大学文理学部社会学科教授）

私たちは、川合隆男監修『戸田貞三著作集』（全14巻+別巻、大空社、1993年）によって、戸田先生の学問的全体像の把握が可能になった。先生の研究は、家族が中核になっているが、私有財産・職業・社会的地位論、人口・地域社会論、社会調査論、社会学論と幅広い領域について研究を展開してきた。ここでは、家族論を中心にして戸田先生の研究業績を紹介することにしたい。

私は、鈴木栄太郎先生に教えを請いたいと思い1966年に東洋大学大学院に入学したが、この年に鈴木先生がお亡くなりになってしまった。しかし、喜多野清一先生（早稲田大学）が非常勤講師として鈴木先生の担当科目を、ご担当することになった。私は、喜多野先生の最初の頃の講義で先生から戸田先生の『家族構成』の重要性を教えてくださいました。そこで、神田の古本屋街を歩き回り、この書を手に入れることができた（1966年12月6日と記録されている）が、読了したのが1967年2月8日となっている。これが、私が戸田先生の著書と最初に会ったいきさつである。

戸田先生の家族研究における三部作は、『家族の研究』（弘文堂書房、1926年）、『家族と婚姻』（中文館書店、1934年）、『家族構成』（弘文堂書房、1937年）とされているが、ここでは『家族構成』を中心にして戸田先生の研究成果を4つに整理してみた。

第一は、「家族構造論・家族機能論」である。これは、家族の集団的特質（構成上の特徴、結合の性質および機能）を明らかにするとともに、日本の家族構造は「家長的家族」から「近代的家族」へと構造的に変化する可能性を明らかにしたこと。

第二は、「家族人口論」である。戸田先生は、大正期の家族が三世帯世帯で構成されているとの

推測のもとに1920年の国勢調査結果を用いて分析を行った。その結果、この期の家族は、二世帯世帯が最も多かった。これは、三世帯世帯が初婚年齢、有配偶女子の出生率、年齢別生存率等々の条件と適合的に連関して形成されると考えたこと。

第三は、「家族の地域差の分類とその形成要因論」である。戸田先生は、日本の家族を分類すると「内地一般型」「東北地方型」「都市型」になることを明らかにした。こうした家族型の違いは、都市化の進展度の影響が大きい、農村的地域では耕地面積の大小、分家の難易度、分割相続の有無の差異によって生じるとしたこと。

第四は、「非家族的な生活者論」である。戸田先生は、都市化に伴って家族外生活者（単身者）が増加する傾向を明らかにするとともに、このことは家族のもつ機能（内心の安定、物的生活の保障、道徳性の滋養）が享受できない単独世帯層の増加を意味しているとした。とすれば、つながりの喪失（無縁化）等々によって新たな問題が発生する可能性を指摘したこと、である。

これらの研究成果は、『大正9年国勢調査報告』『全国民事慣例類集』『日本帝国人口動態統計』『統計時報』『民法改正要綱』『分家慣行調査』等々の分析を通じて紡ぎ出されたものであるが、その研究業績は、現代でも通用する側面を有している。戸田先生が調査の達人といわれる所以は、ここに存すると言えよう。



『家族構成』
（新版、新泉社、2001年）

安藤 由美 (琉球大学法文学部教授)

1970年代に社会学、歴史学、人類学、人口学などの学際的な交流から生まれたライフコース・パラダイムの立ち上げに家族史研究の立場から加わり、生涯これを先導し続けた1人が、代表作『家族時間と産業時間』(原題 *Family Time and Industrial Time*, 1982, 訳書1990年, 早稲田大学出版部)で知られるタマラ・K. ハレーブン(1937-2002)である。彼女がめざしたのは、個人の人生や家族の生活周期を歴史時間の中に位置づけ、これらの異なる水準の時間の相互関係を通して、歴史のダイナミクスを解明することであった。

この、彼女の社会史家としての評価を不動のものとした『家族時間と産業時間』は、米国ニューハンプシャー州マンチェスター市で19~20世紀初頭に世界最大規模を誇ったアモスケグ社の紡績工場とその労働者家族の関係を扱ったものである。時代は米国における繊維産業の勃興期、企業は工場規模を拡大して生産力の増強を図るために、より多くの労働者を農村出身者やヨーロッパからの移民に頼らざるをえなかった。このような労働力不足の時代に、親族ネットワークやエスニック集団は、労働者のリクルートや訓練、生活保障といったあらゆる側面において、会社に対して影響力を行使したのであった。つまり、労働者の家族および親族ネットワークは、巨大工場の発展および産業化を推し進めたアクティブ・エージェントでもあったことを、ハレーブンの研究は突き止めたのである。従来の、産業化の犠牲者としての家族という社会解体論的な見方に修正をせまるものであったという意味で、この研究が社会科学とりわけ社会学に与えたインパクトは大きい。

その研究方法も当時としてはきわめてユニークであった。歴史家として企業や行政に関するドキュメントを利用しているのは当然であるが、そうした、いわゆる「史料」にとどまらず、約1,800

人分の工員の雇用記録をもとにしたコンピュータによる計量分析、実際に工場で働いた人々へのインタビュー(オーラルヒストリー・データ)といった、多面的な方法を駆使して、さまざまな角度から労働の現場や家族生活を再構成している。ハレーブン自身、歴史学という枠を超えて、社会学や人類学の手法をどん欲に取り入れて活用している。その点は冒頭に述べた、まさに学際的なライフコース研究の面目躍如たるところである。

アモスケグ社の研究以降、高齢期を迎えていた元工員とその子どもたちとの世代間関係に焦点を移す一方で、ハレーブンは、1980年代に入り、日本の伝統工芸である京都西陣織の研究に着手し、何人もの職人にインタビュー調査を行った。アモスケグ研究と同様に、技術革新や経済の変化に対して職人の仕事や家族がどのように適応してきたかを問うのが目的であった。その成果は *The Silk Weavers of Kyoto* (2002年)にまとめられている。

ハレーブンは、ユダヤ系としてルーマニアに生まれ、第二次世界大戦後、社会主義体制となった母国からイスラエルに一家で移住した。大学院進学で米国に渡った彼女は、学位取得後、同国の大学に職を得て、終生米国で研究者としての道歩んだ。こうした彼女のライフコースが、20世紀の歴史そのものでもある。激動の時代を生き抜いた彼女の経験が、精神的な研究姿勢のみならず、個人史と社会史の相互作用についての卓抜な研究構想力の源になっていたことは想像に難くない。



『家族時間と産業時間』